

「満蒙開拓」の史実を語り継ぐ

会員 寺沢秀文

(「満蒙開拓平和記念館」副館長・専務理事)

1. 驚きであった両陛下のご来館



記念館にご来館頂いた両陛下

昨年11月17日、天皇・皇后両陛下が下伊那郡阿智村にある全国で唯一の満蒙開拓に特化した「満蒙開拓平和記念館」に「両陛下の強いご希望」によりご来館されました。不動産鑑定士としての本業の傍ら非常勤の副館長兼専務理事として当記念館でボランティア活動する当方も、来館ご内示の3ヶ月ほど前からの準備、ご来館当日、またご来館後までも含めて、このことにかかなりの時間を費やした昨年後半でした。今回の両陛下のご来館は「あるいはいつかは」とも思ってはいたものの、まさか開館からまだ3年半のこの時期にご来館頂けるとまでは思っていなかっただけに、宮内庁から内々でのご内示のあった時には記念館関係者一同も大変驚いた次第でした。とりわけ、この記念館構想の「言い出しっぺ」として当初から関わってきた当方にとっても、このご来館は大きな驚き、かつ喜びであったと共に、ご来館当日は当方が両陛下のご案内役を務めさせて頂いたこの貴重にして名誉ある体験は忘れられないものとなりました。

今回、両陛下にもお越し頂いたこの満蒙開拓平和記念館のことについて寄稿して欲しいというご要望をお受けし、このことに触れ、また私事ながら、この記念館や満蒙開拓に対する当方の関わりや思い等について、以下少しばかり触れさせて頂くこととしたいと思います。不動産鑑定には全く関係の無いテーマにて恐縮ではありますが、全国で最も多くの満蒙開拓団を送出したこの長野県の大切な現代史の一端でもありますので、ご一読頂ければ幸いです。また、冒頭、まずはこの記

念館建設時、またそれ以降も、県内外の不動産鑑定士の皆さん始め多くの御関係者の皆様方より多くのご寄付等賜り、その後も厚いご支援等を頂いておりますことに厚く御礼申し上げます。

2. 旧満州と満蒙開拓団送出の背景

平成25年4月、下伊那郡南端の阿智村に開館した「満蒙開拓平和記念館」。ここになぜ全国で唯一の満蒙開拓に特化した記念館が、それも民間運営として開館されたのか、その経緯等についてまず少し触れたいと思います。それに至るには、まずは「(旧)満州(国)」と「満蒙開拓(満州開拓)」のことについて触れなくてはなりません。

まず、「満州(国)」についてですが、歴史にお詳しい皆さんには今さらでしょうが、明治期、日本はロシアとの「日露戦争」(明治37～38年)に辛うじて勝ち、その戦勝利益の一環として、それまでロシアが権益を持っていた満州地方の鉄道の権利(後の「満鉄」)を手に入れ、この沿線等を中心として権益を伸ばし、やがて1932年(昭和7年)、日本が実質的な支配者となって「満州国」を建国することとなります。清国の最後の皇帝であり廃帝であった「愛新覚羅溥儀」(満州族)を皇帝に据え、一応は独立国の形態を取り、「五族協和(日、満、漢、朝鮮、蒙古)、王道楽土」等をスローガンとするも、実質的には日本人が支配者的立場にあり、民族差別もある半植民地的な国家(傀儡国家)であったことは、そこに住んだ両親ら開拓団員や多くの人たちも戦後において証言しているところです。今でも中国側ではこの「満州(国)」の存在自体を認めず、中国側ではこの「満州(国)」のことを「偽満」と呼ぶのが一般的です。また、この「満州(国)」は「侵略」等として当時の世界中からの批判の対象となり、これをきっかけとして日本は当時の「国際連盟」を脱退(1934年)し国際的に孤立、戦争へと突き進むきっかけともなったものでした。

そして、この満州国に全国各地、全ての都道府県から約27万人の満蒙開拓団が送り込まれました。また、余り知られていないことですが、日本国内からだけで

なく、当時日本に統治され植民地となっていた朝鮮半島からも多くの朝鮮人の満蒙開拓団員がこの旧満州に送り込まれています。では、なぜ、この満州国に沢山の開拓団員が送り込まれたのか、それには大きくは2つの理由があったとされています。まず、一つには子沢山であり貧困、疲弊状態にあった地方農村等の国内からの「人減らし」、そしてもう一つは満州の権益を争う北のソ連や現地の反日勢力等に対するためのいわば「人の盾」、「人間の防波堤」を配置するためにであったとされています。当時の国内農村の多くは貧しく、子沢山の中で分け与える田畑も無い中で、「満州に開拓に行けば20町歩の大地主になれる」という誘い文句は農家の次男、三男坊には大きな魅力でした。私事となりますが、当方の亡き父も同じでした。父は現在の下伊那郡高森町、かつての旧山吹村の農家の8人兄弟の三男坊であり、分けてもらえる農地も無い中で、次兄と共に満州へと渡満した開拓団員の一人でした。そして、この開拓団は北のソ連や現地の抗日活動等に対する備えとするための国防上の一端を担わされて、後の時期での渡満になればなる程、危険な奥地方面へと配置されていきました。前述の日露戦争に敗れたロシアはその後、「ロシア革命」によりソビエト連邦（ソ連）と国名が変わりますが、このソ連はその後旧満州の奪回を狙っていたと言います。そして、それは当時の日本にとっては大変な脅威であり、「満州は日本の生命線」と言われ、満州の防衛は国家的な使命でした。その防衛の一端を民間人である開拓団が担わされたのが満蒙開拓のもう一つの姿でした。昨年秋、旧満州の奥地、かつての旧ソ連と旧満州との「旧ソ満国境」に近い黒竜江省の宝清県という場所を訪ねました。この旧ソ満国境に近い危険な地域にも長野県などからも沢山の開拓団が送り込まれていました。旧満州国には日本の陸軍（関東軍）が配置されていましたが、広大な旧満州の大地を実質支配し、北のソ連の脅威等に備え、現地でも多発していた抗日活動（日本側では「匪賊」などと呼んでいた）を抑えるにはそれだけでは不十分で、それを補う目的も持って開拓団は主には旧満州の北半分（北満）を中心として配置されていきました。そして、関東軍の食糧、軍馬等の供給基地とし、最後には兵士の補充基地とするために日本人の開拓団を現地に展開していったわけでした。

3. 最も多かったのが長野県



旧満州の広大な大地

このような国防の一端という目的をも担わされて全国から約27万人の開拓団が送り込まれ、全国全ての都道府県から送り込まれていきますが、その中で圧倒的な多さで第一位であったのが我が長野県でした。満蒙開拓の団員数については各種の異なった数字がありますが、唯一、都道府県別の団員数が掲載されている『満州開拓史』という書籍に掲げられている数字を見ると（別添資料1表、P39参照）、第1位は長野県で37,859人、第2位が山形県の17,177人ですから、その2倍以上という圧倒的な多さです。また、別添資料2表（P40参照）として長野県内の当時の地区別での送出数を見ると、飯田・下伊那地方（以下、「飯伊地区」と略す）が8,389人と最も多く、全県の約1/4を占めます。この数表では長野県の総数は32,992人となっていますが、これは旧満州から引き揚げてきた元満蒙開拓関係者による全県組織である「長野県開拓自興会」（既に解散）が作成した開拓団員名簿によるものであり、これはソ連が満州に侵攻した昭和20年8月9日に現地の開拓団に籍のあった長野県出身者を拾い出した数字です。したがって、前記の1表における数字とは食い違いがあります。

では、なぜ長野県が全国でも最も多く、そしてその中でも飯伊地区がこのように圧倒的に多かったのかですが、一つには全国の地方農村部と同じように山間地が多く、分けて与える農地等が少ないという地形的な理由も大きいも、やはり当時の県内、あるいは飯伊地区の指導者層の中に満蒙開拓推進論者が多かったことが大きな理由であったと言われてしています。前記通り、農家の8人兄弟の三男坊であった父も、分けてもらえる農地も無い中で、当時は「満州熱」とも言われてい

た世相の中で、満州への誘い文句に乗って次兄と共に渡満していった口でした。当時、長野県を含め農村部の主力産業であった養蚕業は、世界大恐慌の嵐の中で生糸価格の暴落や冷害・霜害等で打撃を受け、農村は貧困に喘ぎ、父の家も祖父が村議会の副議長を務める比較的裕福な農家であったにも関わらず、当時は主要な収入であった生糸値が暴落し学費にすら困るような貧困状態であったと言います。その父が満州行きを決意したのは、この飯伊地区から多くの開拓団員が参加した「松島自由開拓団」という開拓団の生みの親である松島親造という方の講演を聞いたことからであったそうです。この方は、旧下伊那郡市田村（現高森町下市田）の出身であり満州国吉林省総領事館の朝鮮課長であった方で、日本帰国の度に講演会等で満蒙開拓の有為性を説き、これを地域の行政や教育界の指導者層が支持し、早い時期から自由開拓団として送出していったわけでした。父はこの松島親造氏に心酔し、渡満後の1年目の冬、農耕等できない冬期間中の半年近くを吉林市の松島氏宅に下宿生活した程でしたから、開拓団員募集に自ら進んで手を挙げています。その時の団員の面接試験は下伊那農学校（現下伊那農業高校）の初代校長・芝原彦十校長の飯田市内の自宅で行われたのだそうです。そして昭和16年4月に最初は単身にて渡満しています。この松島親造のような人だけでなく、長野県内には多くの満蒙開拓推進論者がいたと言われています。行政界においても同様で、例えば、満蒙開拓を管轄した「拓務省」（後には大東亜省）からの指示を受けて団員募集等を行った各県での担当部局が拓務課であり、後に長野県知事となった西沢権一郎氏もその拓務課長を務めています。いわば満蒙開拓を送り出した先頭にいた方です。当時の世相等の中で国策でもあった満蒙開拓の送出に行政界、教育界等が深く関わったのは当然の成り行きだったのでしょうか、しかし、その総括、反省等は戦後どのようになされてきたのかは考えなくてはならないところだと思います。

また、長野県が最も多かった背景として、国策等に素直に従う勤勉な県民性や、あるいは当時、取り締まり対象にあった共産党員が大量に逮捕された「教員赤化事件」（昭和8年）で特に県内の教員から多くの逮捕者を出した長野県教育界では、その名誉挽回のために国策であった満蒙開拓送出のノルマ達成に積極的に協力することで名誉挽回しようという思惑も働いたとい

う点を指摘する研究者の方もいます。

いずれにしても、このようにして長野県からは全国で最も多くの開拓団員が満州へと送り込まれます。この満蒙開拓団、最初は武装移民団（試験移民団）とも言われ、全国各地からの開拓団員と共に渡満していきますが、やがて満蒙開拓政策の本格化に伴い、単独県での募集の全県開拓団が送出され、やがては個々の村からの分村という形での「分村開拓団」が全国各地から送出されます。その分村開拓団の全国で一番最初の送出は長野県からで、現在の南佐久郡佐久穂町の一部である旧大日向村からの分村が最初の例でした。この大日向村開拓団は現地では「モデル村」と言われ映画や小説にまでなったほどでした。この大日向村開拓団からの引揚者たちが戦後に再入植した場所が浅間山麓、軽井沢町の現在の大日向地区です。昭和天皇、今上天皇が時々ここを訪問されるのは静養先の軽井沢にあると言わばかりでなく、全国で最初の満州への分村の引揚者たちの再入植地であるということも大きく影響していると思います。

4. 様々な開拓団の形態

かくして日本各地から渡満していった満蒙開拓団ですが、その送出形態等には様々なものがありました。なお、「満蒙開拓」とも「満州開拓」とも言いますが、当時も今もどちらも使用されており、当初段階等では「満州国」の版図に内蒙古の一部も含まれていたことから「満蒙開拓」と通称されていました。後に国も「満州開拓」と呼称統一しますが、当初段階で関わった開拓団の多くの人々は「満蒙開拓」という呼び名に親しみを持っていること、また前記通り中国側ではその侵略性等から「満州」という言葉自体を忌み嫌っていること等もあり、当記念館でも館名を「満州開拓」ではなく「満蒙開拓」と冠した経過があります。その満蒙開拓団、国策としては、満州国が建国された昭和7年から第一次開拓団が試験移民（武装移民とも）として送り出され、その試験移民の後、昭和11年の第五次からは一般開拓団に移行し、単独県送出としては全国で最初の全県規模開拓団の「黒台信濃村開拓団」を送出したのも長野県でした。これに続いて、貧しい農村等からの分村という形で「分村開拓団」が送り出され、それも集まりが悪くなると周辺の数ヶ村などが合同で送り出す「分

郷開拓団」が送り出されていきます。貧しい寒村等からの満蒙開拓団送出を推進するため、「農村経済更正計画」というのを立てさせ、その中で満州への分村等を進めた村の母村には財政的支援をする等の「アメ」を与えることにより送出を煽っています。しかし、戦争の激化による徴兵等により、開拓団員の集まりが悪くなると、それよりも年少者を対象としての満蒙開拓の送出を図るようになります。僅か満14～17歳の青少年たちを対象とした「満蒙開拓青少年義勇軍」です。各地、各校に送出人数の割当が行われ、現場の教師たちもそのノルマ確保に追われることになります。彼らは現在の水戸市にある「内原訓練所」に集められ、3ヶ月程度の短い訓練を受けた後、屯田兵的に主には旧ソ連国境近くの北満の地に送り込まれて北満警備の一端を担うことになります。「満蒙開拓団」約27万人のうち約3割はこの青少年義勇軍でした。長野県内からも6,936人(未渡満者含む)もの青少年義勇軍が渡満等しています。



満蒙開拓青少年義勇軍の少年たち

また、開拓団の多くは地方からの送出でしたが、地方からのみでなく東京など都市からも送出されています。世界大恐慌下にあった日本国内では農村部だけでなく都市部でも経済困窮しており、有名な例としては現在の東京都品川区の一部である荏原区にあった武蔵小山商店街では商業者等が食べられなくなってしまう、商店街を挙げて農業移民として渡満していった「荏原郷開拓団」という団などもあり、彼らは「転業開拓団」とも呼ばれています。実はこの東京からは約11,000人と全国で9番目の多さで渡満しており、前記の両陛下来館時にこのことをご説明申し上げると「東京からもそんなに沢山行っているのですか」と天皇陛下も驚いておられました。また、開拓団の多くは現

地では農業に従事した農業移民でしたが、中には沿岸部で夏季には漁業も行う「漁業開拓団」や「酪農開拓団」、「林業開拓団」なども少数ながらありました。

5. 現地での開拓団の生活の様子など

かくして日本各地から渡満していった開拓団の人々の現地での生活の様子ですが、少し当方の父の例等に触れてみたいと思います。父が昭和16年に渡満して行ったのは吉林省の「水曲柳開拓団」という場所でした。「満蒙開拓」ですから、荒野を開墾しての「いざ開拓を」と勇んで渡満していったその場所には、既にもう家も畑も用意されていました。実は、満蒙開拓は「開拓」とはいいながら、その多くが実質的には本来の「開拓」とは言い難く、結局は日本による侵略の加担者として現地の人々の田畑や家を奪ったという面も多分にあったという事実は否定できないところです。一部には辺境地に入り、実際に原野等を開墾した開拓団も少なからずあったものの、開拓団の多くは現地の中国人の農地や家を半強制的に買い上げ等し、これを強引に追い出し、そこに入っていったという入植形態がかなりを占めるのが実態です。この既耕農地の買い上げ等に際しては、国策会社であった満州拓殖公社や日本軍(関東軍)なども後ろ盾となり、実際の買収等は満鉄の子会社である「東亜企業」という不動産会社などが当たっていたと言います。父達の入っていった「水曲柳開拓団」も同じであり、現地の中国人たちから買い上げたという農地を満州拓殖公社から分け与えられ、住む家も元々は中国人の家であったと言います。幸いこの水曲柳での現地の人々との交流は比較的穏やかで、水曲柳の属する吉林省には朝鮮族が多かったところから、父の家でも朝鮮人を小作人として主には水田耕作を任せ、父達は畑作を主に行っていたそうです。このような必ずしも実際には「開拓」とは言えなかった満蒙開拓ですから、当然に現地の中国人たちの多くは日本人たちを恨んでいました。終戦直前、ソ連軍が侵攻してきた時、開拓の村を襲ってきたのはソ連軍ばかりでなく、多くの中国人たちも襲ってきました。この時のことを開拓団員の皆さんの多くは「匪賊が襲ってきた」と言いますが、しかしその多くは日頃から日本人のことを恨んでいた現地の中国農民たちでした。満蒙開拓の史実には日本人開拓団の犠牲等の「被害」も沢山ありま

したが、それ以前に現地の人々に対する「加害」もあったという満蒙開拓の両面性もまた忘れてはならないことだと思います。

私事が続き恐縮ですが、父は昭和16年の渡満時は独身でしたが、3年目の冬に家族招致（今でいう婚活）のために帰国、人を介しての紹介で母と見合いをして結婚しています。当時のことですから、結婚式の1週間前に初めて2人だけで会ったのだそうです。こうして母もいわゆる「大陸の花嫁」として渡満することとなり、昭和19年4月、母は父と共に満州へと渡り、翌20年2月に長男を授かっています。しかし、平和な生活も束の間、戦局は日々悪化し、不文律ながら「開拓団からは徴兵されない」という話しであったものが、世界最強と言われた関東軍も南方戦線等へと兵力を割かれ、ついに開拓団からも「根こそぎ動員」と言われる徴兵が行われるようになります。父も終戦の僅か2週間前に赤紙（召集令状）を受け取り、2日後には満州国の首都であった新京（現長春）にて入隊しています。しかし、銃など武器は不足にて支給されず、塹壕掘りなどをやらされていたそうです。そして、父はそのまま終戦と共にソ連軍の捕虜となってしまい、3年間のシベリアでの抑留生活を送ることとなります。私事となりますが、我が家に両親と長兄が満州時代に撮ったたった1枚だけの写真が残されています。カメラなど個人では持っていない当時、牛車に約1時間揺られて町に出て、その写真館で撮ったたった一枚の家族写真だったんだそうです。この写真は終戦時に現地で失われ、長らく当家にも無かったのですが、一昨年夏、母が94歳で亡くなった時、母の姉の家から「古いアルバムの中にあった」として持ってきてくれた70年ぶりの当時の家族写真です。ここに写っている長兄も終戦の年の冬を越せず、新京（現在の長春）の避難民収容所で僅か1歳の幼い命を落としています。



満州での唯一の家族写真

6. 開拓団の悲惨な逃避行と越冬の中での多くの犠牲



旧満州に残る開拓団住居

渡満後、取り敢えずは平和な生活を送っていた両親ら開拓団の人々でしたが、苦難が襲いかかります。昭和20年8月9日、突如として、不可侵条約（中立条約）を結んでいたはずのソ連がソ満国境を越えて侵攻してきます。しかし、この時、現地の開拓団には若い男性の姿はありませんでした。当時、世界最強とも言われていた日本関東軍でしたが、戦局の悪化に伴い、その戦力の多くが南方戦線や本土防衛等のために転出し弱体化してしまっていますが、数の上でもこれを補うためにろくに軍事訓練も受けていない開拓団の18歳から45歳の青壮年男性を全て徴兵してしまいます。この「根こそぎ動員」という徴兵により壮青年男性の姿は開拓団から全て消え、残されていたのは女性、子供、老人ばかりでした。ここにソ連軍、そして日頃から日本人のことを恨んでいて暴徒化した一部の現地中国人たちが襲いかかり、悲惨な逃避行が始まります。ではこの時、開拓団を守るべき日本軍とは言えば、「戦略上の理由」からといち早く南方にと退き、前線には一部の国境守備隊等を除けば日本軍はもういませんでした。これは早い段階から関東軍内部では決定されていたことで、戦力低下していた関東軍を効率的に戦わせるため朝鮮半島寄りの南方まで引き下がり、開拓団の大半が住む満州の約3/4は「放棄地域」とするとされていたのです。そして、その転進南下時（退却とは言わなかった）には、敵にそのことを悟られないようにと開拓団にも一切知らせず、それどころか敵の追撃を防ぐためにと鉄道や鉄橋まで爆破して南下してしまいました。守るべき軍隊も無く、逃げるべき鉄道も鉄橋も破壊され、女、子供、老人ばかりの開拓団の逃避行は悲

惨そのものであり、「生きて虜囚の辱めを受けず」というのが当時の教育でしたから、「敵の捕虜となって辱めを受けるよりは自分たちの手で」と集団自決を選ぶ開拓団も少なくありませんでした。また、逃避行する開拓団も、昼は山に隠れ、夜に逃避行を続ける中で、小さな子供、赤ん坊が泣くと「敵に見つかるから殺せ」と言われ、やむなく手に掛けた人、あるいは山の中に置いてきた人も沢山ありました。また、「足手まといになるからもう置いていってくれ」と雨で増水した川の手前で自ら残った老人達、多くの悲しい犠牲がこの時ありました。そして、この時、置き去りにされて拾われたり、死なせるよりはと中国人に預けられたりする等の中で、いわゆる日本人残留孤児・婦人が生まれ、その苦難は戦後も長く続くところとなりました。

我が両親はと言えば、父は終戦の僅か2週間前に「根こそぎ動員」により徴兵され、そのまま終戦、シベリア抑留を経て、ようやく日本に引き揚げることが出来たのは3年後の昭和23年のことでした。母はと言えば、ソ連軍侵攻と共に他の開拓団員らと共に開拓地を逃げ出し、どうにか新京(現在の長春)の避難民収容所まで辿り着き、ここで終戦の冬の厳しい越冬生活を過ごすこととなります。しかし、どこかの避難民収容所でも劣悪な生活環境と酷寒の中で多くの犠牲者を出し、当方の長兄もここで流行病により僅か1歳の幼い命を落としています。関東軍の家族等や開拓団以外の民間人等の多くは終戦と同時に帰国を果たしている中で、開拓団のほとんどは現地で越冬せざるを得ず、この越冬時に栄養失調や流行病等で亡くなった人の方がソ連侵攻時の犠牲者数よりも遙かに多いというのが実際です。終戦後、旧満州に取り残された日本人は約170万人とも言われますが、特にソ満国境等にも近い北満に置き去りにされ、ほとんど着の身着のまま逃れてきた開拓団の犠牲は甚大なものがあり、その中から生まれてきた前述の日本人残留孤児、その孤児のかなりが開拓団の子弟であったのはこういった状況によるものでした。

旧満州に残された日本人たちが終戦の年に日本に引き揚げることが出来ず、現地に留まざるを得なかったのは、終戦直後の「在外邦人は現地に留まって現地で生き延びよ」という当時の日本政府の方針があったと言います。これを裏付ける当時の政府が発した2つの文書があります。最初の文書は昭和20年8月14日、

ポツダム宣言受諾決定の直後に外務省が外地の日本人達に出した文書で、「居留民はでき得る限り定着の方針を執る」とあり、要するに外地にいる日本人は現地でやっていけというものでした。もう1つは同じ8月の26日に大本営が発した文書で、そこには「満鮮に土着する者は日本国籍を離るるも支障なきものとす」とあります。要するに、満州や朝鮮半島で住む日本人は日本国籍を捨てても構わないから現地にとどまれということでした。数年前、全国で日本人残留孤児が国を相手としての「残留孤児訴訟」が起こされた時、この残留孤児達は「私たちは国から三度捨てられた」と訴えました。開拓団の子弟が大半である彼らは「私達は移民として満州に送り込まれながら、最後には国によって棄民とされた」と言っていた背景にはこのような状況、背景があったからでした。

7. 戦後の国内開拓の労苦の中から

我が子を失う等の中でどうにか厳寒の冬を生き抜いた母たちが、ようやく日本の土を踏めたのは翌昭和21年7月のことでした。この在満邦人たちの帰国実現の影には、命を賭して日本に渡り、GHQ(占領軍)のマッカーサー総司令官に直接これを訴えた丸山邦雄氏(飯山市旧富倉村出身)をリーダーとする3人の在満邦人救済団の活躍があったことは余り知られていないところです。その当時の様子はアメリカ在住の子息・ポール邦昭丸山氏の著書「満州・奇跡の脱出」等により近年になり明らかにされましたが、その活躍等により、母らに在満邦人の多くは現在の遼寧省の「葫蘆島(ころとう)」という所から日本へ引き揚げてくる事が出来ました。シベリア抑留されていた父がどうにか生きて引き揚げたのは更にそれから2年後の昭和23年秋のことでした。

こうして多くの犠牲を出しながらもどうにか故国の地を踏むことの出来た開拓団員らも、戦後の道のりは決して楽なものではありませんでした。元々分けもらえる農地も無く満州へと渡っていった者が大半だけに、懐かしき故郷に帰ったところで、そこは必ずしも安住の地ではなく、生きる場所を求めて、再び故郷を離れ都会や県外に出たり、これまで手つかずであったような奥深い山中へと開墾に入っていった人々も沢山ありました。戦後、引揚軍人約350万人、在外邦人

約320万人の外地からの帰国者の受け入れ等のため、戦後すぐに政府は全国で「緊急開拓事業」を実施します。長野県内でも約200余の開拓組合による新規開拓が行われ、これらの地にも満州からの引揚者が多く入植していきました。しかし、元々手をつけられていなかった山間奥地等の劣悪な環境の開拓地が多かったため、その離農率も高く、また故郷近くでの再入植地が得られず、県外へと再移住していった人たちも多くなりました。父達の水曲柳開拓団の引揚者の中からも、故郷で定住地を得られず、再び故郷を離れて県外へと出て、北は北海道から南は九州、あるいはブラジルまで再び開墾に入っていったりしています。その中には、あの富士山麓の旧上九一色村に再入植していった人たちも沢山います。かつてオウム真理教のサティアンが建てられていた富士山麓のあの場所は戦後、満州から引き揚げて後、この飯伊地区出身者たちも移っていった人たちが入植した場所そのものであり、あの時反対運動を繰り広げていた地元民たちの中にも多くの満蒙開拓からの引揚者、長野県出身者の人たちがいました。

再び私事にて恐縮ながら当方の両親はと言えば、父よりも一足先に帰国し父の実家に身を寄せていた母は、しばらくして父がシベリア抑留となり生きることが判明、ならばと現在の下伊那郡松川町大島の「増野」開拓地に入植し(今も当方が住む場所です)、一足先に開墾の鋤を振り、父の帰国を待つことになりました。そして、昭和23年に父がシベリアから引き揚げてきて、父と母は共に開墾に励み、ここで生まれた当方も貧しい開拓農家の子として家の畑仕事を手伝いながらの子供時代を送りました。そして、当方が子供の頃から父から聞かされてきたこと、それは「戦後ここに再入植し、今度こそ本当の開墾の苦勞をする中で、改めて、自分たちの大切な畑や家を日本人に奪われた現地の中国人たちの悲しみ、悔しさがよく分かった。あの戦争は日本の間違いであった、中国の人たちには本当に申し訳ないことをした」という悔恨の言葉でした。父のこの言葉が、今、当方が記念館活動や帰国者支援活動等にボランティアとして取り組む原点ともなったことを思うに、語り継ぐことの重要性を改めて思うところです。元開拓団員の皆さんの中には当時の辛い記憶等から、余り当時のことを話さない人たちも少なくない中で、一介の農民ではあるも、自分の言葉で率直にその思いを我が子に語ってくれた亡き父のことを恥ずか

しながら子として誇りに思い、改めて感謝したいと思っています。

8. 満蒙開拓の語り継ぎの始まりと当方の関わり

日中双方含め多くの犠牲者を出して幕を閉じた旧満州、そして満蒙開拓。しかし、その犠牲者数の多さの割には戦後語りられることが少なかった史実であるというのも事実です。それはやはり後述の通り、余りこのことに触れることを良しとはしない、いわば「不都合な史実」であったことが多分に影響していたことは間違いのないところです。送り出した側にとっても、また送り出されて渡満していった側にとっても、余り振り返りたくはない歴史でした。それだからこそ、あれだけの多くの犠牲者を出しながらも満蒙開拓に特化した資料館等が全国どこにも無かった最大の理由であったと思います。その全国どこにも無かった満蒙開拓に特化した記念館が、何故この飯田・下伊那の阿智村に建てられたのか、それはやはり前述の通りこの地域が全国で最も多くの開拓団を送出した地域であったということが大きく影響しています。満蒙開拓平和記念館の建設実現の母体となったのは当方も副会長を務める「飯田日中友好協会」という民間団体ですが、この協会が誕生したのはやはり満蒙開拓とそこから生まれた残留孤児たちのことが大きく関係しています。戦後しばらくしてのこと、旧満州に残されたもののその多くは死んだものと思っていた沢山の日本人の子供達が残留孤児として現地で生きているということが判った時、中国側にこの日本人残留孤児の早期帰国実現を訴えたところ、中国側から「その前にやるべきことがあるはず」と指摘されたことありました。それは、戦時中、日本国内での労働力不足を補うために中国から強制連行されて日本各地のダム建設現場や鉱山などで強制労働に課せられて犠牲となった多くの中国人殉難者たちの遺骨の収集、慰霊、送還ということでした。これを受けて、この飯伊地方でも天龍村の平岡ダムの建設現場に強制連行されてきた中国人たちの中から約80人の殉難者があったところから、まずはこの遺骨収集と慰霊法要の実施を行うためにと組織されたのが飯田日中友好協会の前身の日中友好協会下伊那支部でした。この時の支部長が阿智村等から送山の「阿智郷開拓団」の団長

であった小笠原正賢氏、そして事務局長は長らく残留孤児の帰国実現に尽力し「残留孤児の父」として知られ、最近製作された映画『望郷の鐘』の主人公でもある阿智村長岳寺の住職であった山本慈昭氏でした。こうした背景等から出発した飯田日中友好協会は、その後も活動の中心を残留孤児等の帰国支援活動に置き、全国でも屈指の活動を展開してきました。

その中国帰国者の帰国支援活動や日中友好協会活動等に当方が関わりを持つようになったのは、東京から帰郷して不動産鑑定士事務所を飯田市内にて開業してから約10年も経ってからのことでした。前述した父の述懐はいつも脳裏にはありながらも、事務所を開業してからはしばらくは本業にも追われ、また両親が営んでいたリンゴ園も維持し、更には青年会議所（JC）活動やそれにも関わるまちづくり団体等への参加等に追われるなどしており、日中友好協会活動への参加はかなり後になってのことでした。参加の契機となったのは、かつて長野県の主催により実施されていた「信州青年の船」という事業があり、その平成4年実施の第19船の団長を務めさせて頂き約340人の信州各地の青年たちと共に訪中させて頂いたことからでした。これを契機として日中友好協会に入会することとなり、以降、中国帰国者たちの帰国支援のボランティア活動等に取り組むこととなりました。当方がこの活動に関わりを持つようになった頃にはまだ満蒙開拓の語り継ぎ等にはほとんど取り組んでおらず、まずは帰国者支援活動で精一杯の状況でした。当方もいくつかの帰国者家族のお世話役としてその帰国準備、住まい探し、家財集め、仕事探し等に本職の合間をみて追われまくっていた時期でした。

そして、この帰国者支援活動を重ねる中で、残留孤児のほとんどが実は満蒙開拓団員の子弟であることが判ってきました。それは何故だろう？と思いました。その理由は前記の背景等によるものなのですが、このことを詳しく知るまでには、残留孤児や元開拓団員の人たちからの聞き取りを始めたり、あるいは語り部の会を始めたり、飯田日中友好協会の中に青年委員会を立ち上げて、満蒙開拓に関する学習会を重ねる等の活動を経ての成果としてでした。そして、そういった学習会を重ねる中で、もっと満蒙開拓の実態等について詳しく知りたいと思い、それを調べていく過程の中で、満蒙開拓に特化した記念館等の類が全国どこにも無い

ことが判りました（但し、現在の内原に満蒙開拓青少年義勇軍だけの資料館があります）。また、帰国者支援活動や自ら始めた満蒙開拓の調査研究や元開拓団員の皆さん等からの聞き取り等を含めた貴重な資料等を記録、保存、活用等していくための活動の拠点の必要性を痛感するようになりました。

9. 記念館の建設構想と建設実現までの紆余曲折

前記のような経過を経て、全国どこにも満蒙開拓に特化した記念館等が無いならば、それを我々の手により、全国で最も多くの開拓団を送出したこの地域でこそ建てようという構想が具体化したのは平成18年のことでした。当方自身としても「とにかく早く手を着けなくては何も始まらない」との思いから、やや強引でしたが、この飯伊地方で発行されている『南信州』という日刊紙に「この飯伊にこそ満蒙開拓記念館を」という一文を寄稿し掲載してもらったのは平成18年5月のことでした。これを契機として飯田日中友好協会の理事会で建設運動への取り組みを提唱し、この年の7月に開催された飯田日中友好協会の第44回定期大会で「満蒙開拓記念館」（当時の仮称）への取り組みが採択、ここに建設構想が具体的にスタートした次第でした。勿論、一民間団体のみで取り組み出来るような事業ではないところから、地域の平和団体、行政、教育界等にも参加協力要請し、行政は当面はオブザーバー参加という形で建設準備会を立ち上げて出発しました。しかしながら、基本的には民間団体を主体とした活動であり、構想スタート当時は元々が法人格も無いような民間団体等が中心となってやっていることだけに、その信用力や事業実施能力等が問われ、「構想自体はいいが、本当に記念館を作ってもちゃんと維持していけるのか」という段階で引っかかってしまい、行政からの財政面を含む積極的支援は当初段階ではなかなか得られないままでのスタートでもありました。構想の「言い出しっぺ」としての責任上、当方が建設準備会の事務局長に就任し、あくまで民間団体としての活動でしたから、事務局も当方の事務所内に置き、本業の傍ら、勿論、無償での事務局長としての奮闘が始まることとなりました。若い人の参加も当時はほとんど

ど無く、当方が準備会の事務全般を担うしかなく、社員、家族等の理解はあったとは言え、本業等への影響をなるべく避けるため、記念館建設に向けての事務等は深夜や早朝、休日などを利用してとなり、一人事務所に泊まり込んでの事務作業という日々が続くこととなりました。

こうして記念館計画がスタートしましたが、記念館の完成までには足かけ8年もかかってしまった通り、正しく紆余曲折の活動でした。全国に向けて建設資金の募金を訴え、民間個人・法人等を中心として寄付金も徐々に集まり始めたものの、平成19年秋のリーマンショック等をあり、寄付金の集まり具合も当初見込みを大幅に下回る状況となってしまいました。そのような中で事業計画の見直し、資金計画規模も何回も縮小することを余儀なくされ、寄付金集めと共に建設候補地の選定も難航しました。当初は飯伊地区の中核であり、合併後の市町村単位としては最も開拓団送出数の多い飯田市内での用地選定等を試みましたが、資金的問題、あるいは行政のやや消極的な姿勢等もあり、飯田市内での用地確保は難航しました。そのような中で、平成20年春になって、飯田市に隣接する下伊那郡阿智村より、「ならば阿智村内にて用地を確保するが」という嬉しいご提案を頂きました。



建設前の記念館用地

当時の岡庭村長は当方の高校の先輩でもあり、仕事等でもいろいろとお世話になっている方でした。この阿智村は前述の「残留孤児の父」と言われた山本慈昭翁が住職を務めていた長岳寺のある村でもあり、飯田市中心部等よりはやや離れるものの、幸いなことに平成20年4月には飯田市と阿智村との行政境付近に新たに中央道「飯田山本インター」が開設、建設用地はここより車で約5分程度の近さでした。建設準備会での

検討を経て、現在の記念館の敷地である村有地を無償貸与して頂く契約が締結されたのは平成21年4月のことでした。これに合わせて、それまでは当方の事務所内に置いてきた建設準備会の事務局も、阿智村内で借りた一軒家に移転しました。また、それまでは当方が事務局長としてほとんど一人でボランティアとして担ってきた事務局の業務も流石に限界にあったところから、平成21年11月よりは常勤の事務局員を雇用、体制も徐々に整っていきました。そして、大きな転換、飛躍となったのは、平成22年8月に阿智村内で建設準備会が開催した「満蒙開拓歴史展」の会場を当選直後の阿部守一県知事予定者(当選後にて就任直前)が訪問され、満蒙開拓を語り継ぐことの意義を重視され、以降、県からの心強い支援等も頂けることとなったところでした。特に平成22年の暮れよりは、長野県からも国等に働きかけて頂けるようになり、当方も県担当部局のご案内、同行により、厚生労働省、文部科学省、外務省の国機関を順次訪問したものの、いずれも「記念館建設を支援出来るような助成制度は見当たらない」という型通りのご回答でした。また、当時の政権与党であった民主党本部にも2回の上京陳情を行いました。確たる成果は得られませんでした。そして、これらの陳情活動等を経て、「地域(地元)が取り組むことを前提として県としても財政的支援を」との方向を県から打ち出して頂いたのは平成23年秋になってのことでした。これまでは慎重であった地元飯伊地区の市町村も「ここまで民間が頑張ってきたのだから」と長野県と歩調を合わせて財政的支援をして頂けることとなり、ようやく建設着手に取り組むことが具体化したのは構想着手より足かけ7年目の平成24年春になってのことでした。この間、建設準備会も平成22年2月には一般社団法人としての認可を受け、また名誉顧問として井出孫六氏(直木賞作家)等にも名を連ねて頂き、社会的認知度を高めることが出来たのは有り難い限りでした。最終的に建物約132坪、建築・土木関係約9千5百万円、展示等約2千万円、諸費等約5百万円にて建設予算1億2千万円、これ以外に開館後の維持を確実にするための運営基金として2千万円を留保することとして、ようやく着工式を挙げることは建設提唱から丸6年余を経た平成24年9月のことでした。

10. 記念館の完成、開館



記念館の外観

かくして建設実現の運びとなった記念館の建物設計は地元・飯田市の若手設計士の新井優氏にお願いいたしました。この新井設計士が設計された記念館建物は平成27年の長野県設計事務所協会の最優秀賞を受賞したことが示す通り極めて優れた傑作です。新井設計士は構想開始からの建設準備会にボランティア参加され、その当初時期に「旧満州を自分の目で見てみたい」と当方らの旧満州調査に自費で同行参加してくれた程の熱い思いで取り組んでくれたものでした。その記念館建物、実は当初計画ではもう少し広い床面積を予定していました。しかし、前記通りの公的資金の助成が決まった中で、行政関係のある方面より「身の丈に合ったもう少し小さなものに」との意見があり、床面積を縮小せざるを得なかったものでした。多くの開拓団員を送出しての犠牲を出した満蒙開拓の歴史、そのことを語り継ぐということのどこを指して「身の丈」と言うのか今でも腑に落ちないところです。満蒙開拓を語り継ぐということは、こういった様々な「理不尽」、「不条理」なことに対する「挑戦」の連続でもあります。

このようにしてようやく建設着手され、足かけ8年、平成25年4月に開館することが出来た記念館ですが、お陰様で開館以来、全国各地から予想以上の多くの来館者にお越し頂いています。実は、ようやく行政からの公的資金の助成が決まった中で、来館者予測数等も含めた「事業計画書」を提出しなければならず、当初、当方の読みとして年間来館者数を2万人として作成、提出したのですが、「そんなに来るはずが無い。もっと現実的な数字を」と言われ、1万人、5千人と減らさざるを得ませんでした。しかし、開館したその年の来館者は3万人を超え、その後もほぼ年間3万人近いペースで経過することが出来ました。このように多くの来

館者にお越し頂けたのも、何よりも満蒙開拓という史実の重み、そしてそこから未来の平和に向けての多くの教訓、そしてそのことを民間施設として伝えていこうとする当館のスタンス等、これについては後述しますが、これらのことが評価されてのことだと思います。

開館から3年半を経た昨年11月、両陛下のご来館の10日ほど前に、開館以来の来館者数が10万人を突破、お陰様にてご来館以降も来館者数が増え、今年1月末段階では来館者数は約106,000人となっています。

11. 記念館に対する様々な意見（その1）



記念館の館内

こうして開館出来、多くの来館者が訪れる当記念館に対しては、開館後も様々な意見が寄せられています。その多くは当記念館を評価し、記念館の趣旨に賛同し激励等を寄せて頂いているものですが、中には異なるお立場からのご意見等もあります。例えば、元満蒙開拓団員の方の中などには、「あの満蒙開拓は間違ったことではなかった。我々があそこに行ったことにより遅れていた満州の農業や経済が発展した」、「満蒙開拓には良い面も沢山あったということを示し、是非、記念館では主張して欲しい」という方もいます。確かに日本の開拓団により現地農業の近代化やインフラ整備等の効果もあったことも事実です。しかし、それはあくまで副次的なことであり、植民地的な傀儡国家として日本人が一番上に君臨し、満蒙開拓も結果としては現地の人々にとっては侵略の加担であったという側面は事実であったと思います。これを言うことは満蒙開拓に命を賭し、多くの犠牲を払った開拓団関係者の皆さんにとっては辛い言葉であろうと思います。しかし、本末転倒してはならず、開拓団の皆さんの苦難、思いや汗、

涙も語り継いでいくも、満蒙開拓が侵略の加担でもあったという事実もまた語り継いでいかななくてはならないことであり、その満蒙開拓の「被害」と「加害」の両面を語り継いでいくこと、その因果関係をきちんと語り継いでいくことが、二度と悲しい犠牲者を出さないことに繋がり、それが多くの犠牲者の人々に対する鎮魂であり、慰霊であるというのが我が記念館の基本的スタンスの一つでもあります。

また、満蒙開拓は国策として推進されたことであり、その国策を結果として支持、協力した国民の責任も当然にあるも、やはり国策として推進した国やその指示を受けて動いた県、市町村等の行政、あるいは教育界の責任も大きいものがあるのも事実です。しかし、この点については前記通り、行政等の一部の個人的意見として「確かに今振り返れば反省すべき点もあるも、当時はそれが世相であり、また国策に従うことが国民のためにもなると信じて当時の行政関係者等も取り組んでいたことであり、これを一概に責めることはどうか」という意見もあります。勿論、それも一理ありますが、やはりそのことにより多くの犠牲を出したという歴史の結果から学ぶ姿勢として、「当時のことだから仕方なかった」で済ませるのではなく、そのようなことが二度と起きないようにするためにも、例え不都合な史実であってもきちんとその史実に向き合い、なぜそのようなことが起きてしまったのかということを探り、そこから未来の平和に向けての教訓として活かしていかななくてはならないと思います。

当時、国策の名の下に行われた満蒙開拓ですが、自らが現地視察で見えてきた体験等に基づいて、「あそこは日本人が行くべき場所ではない」として、最後まで自分の村からは公式な形では開拓団を送り出さなかった村長さんもいました。今の下伊那郡阿南町の一部である大下條村の村長であった佐々木忠綱村長と言う人で、佐々木村長は「例え国策であってもおかしいものはおかしい」として、村内外から「国策に従わない国賊、非国民」と責められながらも自分の村からは分村等の公式な形では満蒙開拓団員を出すことを拒み続けました。その結果、戦争が終わってみれば、その分、この村からの犠牲者が少なく済んだわけであり、戦後高い評価を受けるようになりますが、当時としては大変な勇断であったと思います。改めて、「例え国策であってもおかしいことにはおかしい」と感じるものの出来

る感性を持った賢い国民であるためにも、こういった満蒙開拓のような過去の教訓に学ばなくてはならないと改めて思います。かの佐々木村長がこういった感性を持つに至った大きな背景として、貧しい中で通った「伊那自由大学」といういわゆる市民大学で学んだ思想等が大きく影響したとされています。我が記念館もこういった感性を磨くために資することの出来る「現代の自由大学」でありたいものと思うところです。

12. 記念館に対する様々な意見(その2)

また、この当記念館のスタンス等に関しては、この記念館が旧満州や満蒙開拓をいたずらに美化したり、正当化する施設の類なのではないかという懸念の声を寄せられる方も時々いらっしゃいます。しかし、それは記念館に来てみて頂ければ杞憂であることをご理解頂けると思います。また、開拓団の多くの犠牲という「被害」と共に、結果として侵略の加担でもあった満蒙開拓の「加害」の側面をも明らかにしていくという当記念館の基本的スタンスに対し、「国賊的」とか「自虐史観的」等の右寄りからの批判意見等が出ることも懸念しましたが、そういった意見は今までのところ比較的少ない状況にあります。いわゆる右寄りの人々にとっては旧満州や開拓団のことは余り関心事では無いのか、あるいは関東軍が結果として開拓団同胞を置き去りにして南下してしまったこと等の不都合な事実には余り向き合いたくはないのかも知れません。



記念館の館内

このように当記念館は、右にも左にも寄らず、史実をなるべく客観的に伝え、そしてあのような悲惨な体験が二度とあってはならないということを訴えていくことを目的として運営されています。前記の通り、当記念館が「自虐史観に立ったものではないか」と警戒

される立場の方もあるかも知れませんが、私たちは決して自虐的にもなることはなく、日本という国を愛し、その愛する日本が二度と自国民や他国の人たちを不幸に陥れることが無きよう、この国と風土を守っていくことを強く願っています。そのことが異国の地に、そして戦火に散った多くの人たちの犠牲を無駄にしないことであり鎮魂であると思います。一部の遺族等の方の中には、「あの戦争が誤りであったとしてしまうと、自分たちの親族の死が無駄死になってしまう」という考え方の方もおられます。勿論、お国のためにと戦火に散った人々のことは忘れてはならず、敬っていかなくてはならないことは当然ですが、しかし、戦争の誤りを確認し、二度とあのような悲しい犠牲者を出さない国、世界にしていく努力をすることこそ、この尊い犠牲に真に報いることであるはずだと思えます。そういった意味で、私たちは、旧満州の地に散った人々のことを否定したり、非難したり等するものではなく、国策に翻弄されながらもそこに懸命に生きた人々があつたという史実をきちんと語り継ぐと共に、同時に残念ながら、その満蒙開拓自体は歴史的には誤りであったという事実、現地中国の人々始め多くの犠牲を強いた上でのものであつたという事実をもきちんと受け止め、二度とあのような不幸な犠牲者を出さないようにと語り継いでいくことが、旧満州の地に散った多くの犠牲者に対する鎮魂であると思っています。

13. 記念館に対する様々な意見（その3）

また、当記念館が建設構想当初から最も注意を払っているのは、満蒙開拓の舞台となった中国現地の人々の気持ちや意見であることは言うまでもありません。この記念館が旧満州や満蒙開拓をいたずらに美化したり、正当化しようとするものではなく、歴史への反省も含めて、満蒙開拓を通じて平和の尊さ、戦争の悲惨さを語り継いでいく施設であることは中国側に対しても折りに触れ表明してきているところです。この建設構想の当初段階で、準備会役員にて東京の中国大使館を訪ね、この記念館の建設趣旨・目的を説明し理解を求めたところ、対応してくれた大使館参事官も建設趣旨を良く御理解頂き、「あれだけの大きな史実でありながら、このことに関する記念館等がこれまで日本国内のどこにも無かつたということの方が不思議。史実を語り継ぎ、平和を守っていくためにどうか頑張っ

てください」と逆に激励されたところでした。とは言え、尖閣諸島問題等からの中国側の厳しい反日感情、あるいは5年前に起きた「方正日本人公墓事件」（ハルピン市方正県にある唯一の日本人公墓の脇に現地地元政府が建てた日本人犠牲者名碑に反日活動家が赤ペンキ等をかけ、直後にこの碑が撤去され公墓参拝が出来なくなった事件）等のことを思う時、この記念館の建設趣旨がきちんと中国側に伝わるかの心配もあり、旧満州等を美化、正当化等するものではないか等の誤解を受け、反日活動家等の標的にされはしないか等の懸念も当初段階からしてきました。しかし、この記念館の趣旨等を理解して頂いてか、あるいはまだこの小さな記念館の存在がまだ周知されていないからか、幸いなことに記念館のホームページが海外等からの批判で炎上する等のことは起きてはいません。



旧満州で唯一の方正日本人公墓

また、この記念館の立地に関して、「どうしてこのような交通不便な辺鄙（へんぴ）な山間部に建てたのか。もっと訪ねやすく、人も多い都会等で建てた方が良かったのではないか」というご意見も建設前の段階から、そして今もあります。確かに当記念館は都会等から見れば交通便も悪く、集客上からは不利なことは事実です。しかし、何よりも大切なことは、記念館を建て、これを維持しようとする人たちの思いであり、記念館から発するものが人々の心を打つかどうかこそが大切であると思います。この満蒙開拓の史実の語り継ぎに熱い思いを持つ人々がいなくては、如何に人が多く住む都会などに建てたとしても、これを維持運営していくことは困難だと思えます。そういった意味からして、この飯伊地区は満蒙開拓に係わる記念館を建てるのに最適の場所であったと思います。全国で最も多くの開拓団を送出してしまったというこの地域が背負う言わば「負の遺産」を、戦争への反省、平和希求の

発信、そして国際交流等の「正の遺産」へと置き換えるための努力、英知がこの地域には求められていると思います。そして、この地域であるからこそ、足かけ8年を要してでも記念館の開館まで漕ぎつけたという執念があり、それこそが記念館建設、そして多くの人々の来館にと結びついた源であり、この地で建てられなかったら、それはもう全国どこでも建てられなかったであろうとまで思っているところです。

14. 記念館開館から3年半を経て

こうしてどうにか開館にまで漕ぎ着け、幸いなことに多くの皆さんに来館して頂いている当記念館ですが、当記念館の基本的スタンスとして守っていることがいくつもあります。まずは、言うまでもなくこの記念館の目的は、満蒙開拓の史実を通じて戦争の悲惨さ、平和の尊さを語り継ぎ、世界に向けて平和を発信していくということにあります。そのために、より多くの人々に来館して頂き、満蒙開拓というこれまで余り語り継がれることの少なかったいわば「不都合な史実」とされていた史実をより多くの人に知ってもらうための取り組みが重ねられてきています。私たちの記念館は、建設時の公的助成こそ頂いたものの、その時のお約束として開館後は自分たちでやっていくということにて、入館料収入だけが頼りの民間運営となっています。国策で行われた満蒙開拓を語り継ごうという記念館なのになぜ民間運営として民間人が苦勞しなくてはならないのか、こんなことは国立か県立でやって欲しいという思いはありますが、しかし、そんなことを言っても始まりません。誰かがやらなくてはならないことならば、誰かがやってくれるだろうと待っているのではなく、「だったら私たちがやりましょう」と自分たちで動くことが大切であると思います。そして、その姿勢で取り組んだからこそ全国で唯一の満蒙開拓に特化した記念館を建設することが出来たのだと思います。

このように民間運営ということは財政的には厳しいものがありますが、しかしその一方で展示内容や運営等に関しての規制等も無く、その自由さが保障されているという民間運営ならではのメリットもあります。そして、財政的にも厳しく、学芸員等も置けない中で、学術的にはやや心許ないところはあるものの、しかし展示作成や展示ガイド等も全て自分たちの手で行うと

といういわば市民の手作りの記念館でもあります。そして、満蒙開拓というやや難解な史実を、同じ市民目線であるべく判りやすく伝えていくということに努めています。だからこそ多くの戦後生まれや若い世代の皆さん等にも沢山来館して頂けるのだと思います。また、「あそこの記念館は左寄り(あるいは右寄り)」等として足を運ぶことを敬遠されることの無きように、展示ガイド等に際しても自分たちの主張や意見等を押しかけること等は極力控え、満蒙開拓という史実を客観的に、なるべくニュートラル(中立)な立場で伝えるように努めています。勿論、「平和を目指す」という強い思いはあるものの、それをこちらから強く押し付けるのではなく、記念館の展示等を見て頂く中で、そこから何を感じ、何を学び取っていくかは来館者ご自身であり、またそれだけの力をこの記念館の展示内容は持っていると感じています。



セミナールームでの語り部の会

開館からの3年半の間にも様々な出来事、積み重ね等がありました。当記念館の中では定期的に元開拓団員の皆さん等に「語り部」としてその体験談等を語って頂いています。高齢化等の中でその語り部の皆さんも年々減少傾向にあります。語り部はこの飯伊地方に住む方々を中心としています。時々、県外からもお越し頂くこともあります。どの語り部の方の体験談も貴重で心を打つお話ばかりですが、当方が最も忘れられないのは、隣の岐阜県の現白川町から渡満した「黒川分村開拓団」の団員として渡満していた元開拓団員の老婦人が記念館で語り部として語ってくれた言葉です。それは、「自分たちの都合で他人様の土地に入っていく、自分たちだけが幸せになろうとしたのがそもそも間違いであった。例え狭くても日本の中でみんなと分け合って、自分の手の平の中で幸せを探すべきで

あった」というものでした。この言葉が「満蒙開拓」のほぼ全てを言い表していると思います。

また、こういった日本側の開拓団の体験談だけでなく、客観性を持たせ、多面的な理解を図るためには、現地の中国側の人々の証言の必要性を痛感し、その証言収集等にも記念館では注力しています。開館以降もほぼ毎年、現地への調査訪中団を派遣していますが（参加者の皆さんもみんな自費参加です）、当時、日本人から土地を奪われたという中国農民の老人の方からの聞き取りや、現地に残された日本人残留孤児を育ててくれた中国養父母の皆さんからの証言聞き取り等も現地で行ってきており、その証言ビデオも記念館内で常時上映しています。特にこの中国養父母の皆さんの恩義は日本人として決して忘れてはならないことであり、このことをテーマとした「中国養父母展」が中国ハルピン市で開催されていたものを数年前に見て、「何とかこれを日本国内でも」と現地市民団体と協力して、一昨年秋に当記念館等で開催実現し、この「中国養父母展」はその後、長野県内各地等で巡回展が行われています。この残留孤児に関しては、今もまだ未判明の残留孤児の方もおられ、当方も厚生省より「中国残留孤児肉親調査員」を委嘱され、その肉親調査に当たっていますが、これも戦争が残した悲劇の一つです。

こうして開館後3年半を経過した当記念館ですが、記念館内外の多くの皆さんにより支えられています。優秀な記念館事務局スタッフは薄給の中、本当に良く頑張ってくれています。勿論、我々役員も無給です。記念館をスタッフと共に支えてくれているのは、この記念館で活動して頂いている「ピースラボ」というボランティア団体、約40人の皆さんです。また、「ピースサポーター」という記念館支援会員制度があり、全国の皆さんにこのサポーターとなって頂き、年3千円の会費と共に、様々なご意見等も寄せて頂いています。多くの皆さんに支えられての当記念館であり、単なる「箱物」ではなく、思いのある人々の集う場所となっているのもこの記念館の特徴であると思っています

15. 改めて両陛下のご来館について

これまでの記念館開館までを含めての様々な経過等を経た中での一つの間集大成としての突然の出来事が冒頭の天皇・皇后両陛下のご来館でした。両陛下の

「満蒙開拓平和記念館を訪問したい」という強いご希望により、昨年11月17日、両陛下がご来館になり、光栄なことに当方が当日のご案内役を務めさせていただきました。皇太子時代を除けば、今上天皇陛下がこの飯田・下伊那地方に行幸啓されたのは明治以降でも初めてとのことで、多くの地域の皆さんより「満蒙開拓平和記念館が出来たからこそ、両陛下にこの飯伊に来て頂けた。記念館のお陰」という有り難いお声も沢山頂きました。前述通りの紆余曲折を経ての記念館開館でしたが、それでもどうか建設実現出来たのは、この飯伊地区を始めとする多くの皆さんのご支援あってのことであり、今回の両陛下ご来訪により地域へのご恩返しがいくらかは出来たものとホッとしたのも事実です。



記念館内のご案内（長野県提供）

ご来館日当日、両陛下が館内展示のご見学をされたのは20分間でした（その後に元開拓団員との懇談が約30分）。実は、公平を期すために、天皇陛下はどこの美術館等に行かれても見学時間は20分と決められているのだそうです。僅か20分というご見学時間、早口で知られる当方ですが、この時だけはいつもの2倍ぐらいのゆっくりとした口調で館内展示の説明をさせて頂き、その当方の説明に両陛下はあのいつもの温なお姿のままに熱心にお聞き下さり、またいくつかの御下問（ご質問）もされました。両陛下とも満蒙開拓についてのご関心、知識は極めて深いものがあり改めて驚いたところでした。

今回の両陛下行幸啓のことはテレビニュースや新聞各紙等でも大きく取り上げられ、開館以来大変お世話になっている阿智村の名前が満蒙開拓平和記念館の名前と共に全国に発信されたことも誠に嬉しいことでした。ただ、その報道内容等については、地元紙等の一部を除けば、全国紙等での取り上げも極めて小さく、

その内容も単に両陛下がこの飯伊地方に行幸啓されたということだけにほぼ終始し、両陛下が今回当地を訪問された一番の目的である満蒙開拓平和記念館のこと、そこで伝えている満蒙開拓の史実等については余り触れられていなかったのはやや残念なことでした。「不都合な史実」として受け止められてきたこの満蒙開拓の史実を語り継ぐことの困難さを改めて思った今回のご来館でもありました。とは言え、今回の両陛下のご来館は、これにより満蒙開拓という半ば閉ざされてきた歴史に対して改めてスポットライトが当てられ、満蒙開拓という史実について多くの人々から見つめ直して頂けるきっかけとなったということは極めて大きなことでした。畏れ多いことながら両陛下の今回の御来館の目的、御意図はそこにこそあったと思います。今回の両陛下のご来館は「両陛下の強いご希望」に基づく私的なご旅行として実施されましたが、しかしそれは単に一個人が、「もう少し満蒙開拓のことについて知ってみたいから行ってみたい」という次元のものではなく、「天皇」という特別なお立場で動かれる時の大きな社会的影響等を考えた時、天皇が或る場所に行かれるということは、それはそのまま多くの国民の目をそこに向けさせることでもあり、そのことをご承知の上で、両陛下は全国で唯一の満蒙開拓に特化したこの記念館の訪問を強くご希望されたものと思います。そして、「満蒙開拓に改めて国民の目を向けさせる」ということは、勿論、開拓団として亡くなった人々の慰霊、苦勞した団員らの慰勞等の意味もあるも、それ以上にやはり「二度と繰り返されてはならない歴史」に国民としても向き合って欲しいという願いを込められてのものであったと思います。今回の両陛下のご来館の意義を重いものとして受け止め、これからもぶれることなく、満蒙開拓の史実を語り継いでいきたいと改めてその「覚悟」を深くした今回の両陛下のご来館でした。

16. 記念館の活動の中で

かくして記念館の建設、開館や、今回の両陛下のご来館等を通じて、満蒙開拓に対する社会からの関心が改めて喚起されてきた中で、当方もその記念館運営の事務方のトップとして本業の傍ら館運営に取り組むと共に、記念館開館の準備段階から、そして現在も、満蒙開拓に関する講演依頼等も多く、月平均3～5回程

度、県内外へと講演に飛び歩いてもいます。また、地元を中心として県内各地の高校、中学等での講演の機会も多く、こういった若い皆さんへの講演の機会はなるべくお受けするようにしています。それは、やはり、日本の若い皆さんにも、こういった満蒙開拓という身近な歴史があったこと等を知って頂き、これをきっかけとして日本がこの約150年間、アジアの中でどのように過ごしてきたかという近現代史をきちんと知って欲しいという願いがあるからです。かく言うのも、かなり以前になりますが、アジアの青年達と交流した際に、その最後の夜の交流会の中であるアジア青年から言われた言葉、それがいつも脳裏にあるからです。それは「やはり日本人は信頼できない。それは、かつてあなたたちのお祖父さんたちが私たちの国を侵略したからではなくて、今の日本人たちが、かつて日本がアジアで何をしたかということを知ろうとしないからだ」と言われた時には背筋がゾッとしました。本当にその通りだと思います。そして、その近現代史を若い人たちが知らないのは、それをきちんと教えていない私たち大人の責任でもあります。私たちはこの満蒙開拓という史実を通じて、若い皆さんに近現代史を是非知って欲しいと思っています。日本という美しい四季に恵まれた文化、伝統等の素晴らしさを知ると共に、自分の国の成り立ちや歩み等にもきちんと向き合った日本の若者たちにこれからも世界に羽ばたいて欲しいものと思います。

こうして脈絡も無く開館以来のことを書き連ねてくると、改めて、「良く開館まで漕ぎ着けられたなあ」とも思い、また「開館後も結構いろいろなことに取り組んでいるのだなあ」とも思うところでもあります。同時に、民間運営施設として「まだまだこれからも記念館運営の苦勞が続く」とも思い、また「満蒙開拓のことも、この記念館のこともまだまだ知られていない。もっと情報発信に努めなくては」という思いにも駆られます。しかし、開館までの足かけ8年間の準備期間の間、「絶対に建ててみせる」という信念に何ら揺らぎは無かったものの、一方で「いつ完成出来るのだろうか」と夜も眠れないような不安の続いた日々があったこと等を思えば、今は記念館もあり、ここで活動する仲間があり、そして記念館を支援してくれる多くの皆さんがいます。そして、満蒙開拓の史実から学ぶべき未来の平和に向けての教訓は大きなものがあり、それに

向き合っていくことの意義、必要性は益々大きなものとなっているものと思っています。

この満蒙開拓の語り継ぎや調査研究等に関わるようになってからもう四半世紀、調査研究や研究等のために国内各地を飛び回る時間もかなりであり、また旧満州へと出かけた自費調査訪中も既に30回近くになりました。今年もまた両親のいた開拓地に若い皆さん等を連れて調査に入る予定でいます。本業の傍ら、こういったことにかかなりの時間を取られることも事実ですが、しかし、これはちょっと大袈裟かも知れませんが、このことは私に課せられた生涯をかけてのテーマなのだとも思っています。



記念館スタッフの調査訪中

当方自身として、また当記念館として、記念館構想当初から心してきたこと、それは「先に事実を知った者の社会的責任、それは次の人に語り継いでいくこと」ということです。当方自身にしても、たまたま元開拓団員の二世として生まれたことをきっかけとしてではあるも、それにより関わり、知り得た満蒙開拓に関わる様々なことを、今度は次のより多くの人に伝えていかななくてはならないという社会的使命をも痛感し、長年取り組んできたこの満蒙開拓というテーマであり、そして、その輪は着実に拡がりつつあることをも感じています。

17. 最後に

全国で唯一の満蒙開拓平和記念館、今後も民間運営施設として厳しい館運営が続くこととなり、また中・長期的には来館者数の減少等という局面等に直面する機会も必ずあると思いますが、来館者数の多寡に一喜一憂することなく、例え来館者数が減ったとしても、

満蒙開拓の史実を語り継ぎ、そこから未来の平和に向けての教訓を学んでいくための拠点とするという当館の重要性は何ら変わらず、その基本的姿勢をこれからもぶれることなく貫いていきたいものと思います。これからも、多くの仲間の皆さん、ご支援頂く皆さん等と共に、「小さくともキラリと光る記念館」として、この伊那谷の地から世界に向けて平和を発信し続けたいと思うところです。是非、今後も多くの皆さんのご来館を願う次第です。

最後となりますが、長野県不動産鑑定士協会の会員の皆さんには当記念館も当初段階から多くの御支援を頂いているところであり、平成26年秋には、岐阜県不動産鑑定士協会と長野県不動産鑑定士協会との共催事業として「阿智村の地域作りに学ぶ」という合同研修会を阿智村の昼神温泉に泊まり込みで開催し、その際には当記念館も視察して頂き、両協会から有り難いご寄付も頂戴いたしました。こういった長い間のご支援等に対し改めて御礼を申し上げ、これまでのご恩義にも深く御礼申し上げる次第です。

本業の傍らでのこの満蒙開拓平和記念館への活動参加等ですが、しかし、不動産鑑定士を天職としつつ、この満蒙開拓の調査研究、語り継ぎ活動もこれもまたライフワークとしてこれからも取り組んでいきたいものと思っています。そして、こういった地域活動への参加は、日頃の本業を通じてお世話になっている地域社会への企業としての社会参加、地域還元の一環としても有意義なものと感じながら位置づけているところです。これからも不動産鑑定士として、また満蒙開拓平和記念館の一員として頑張っていきたいものと思っていますので、今後ともご支援ご鞭撻のほど、どうか宜しくお願い申し上げます。

(以上)

全国分村・分郷開拓団 開拓民送出状況 表 1

	都道府県	集合 (団)	集 団		計 (団)	開拓団員数			義勇隊員数			合計		順位
			第7次～10次 昭和12年～16年 (団)	第11次～14次 昭和17年～20年 (団)		(人)	(%)	(位)	(人)	(%)	(位)	(人)	(位)	
			16	長野			21	19	40	31,264	82.6	1	6,595	
6	山形	4	8	5	17	13,252	77.1	2	3,925	22.9	3	17,177	2	
44	熊本	4	2	10	16	9,979	78.7	4	2,701	21.3	11	12,680	3	
7	福島	1	3	3	7	9,576	75.6	5	3,097	24.4	5	12,673	4	
15	新潟	3	4	9	16	9,361	74.0	7	3,290	26.0	4	12,651	5	
5	宮城	3		3	6	10,180	82.0	3	2,239	18.0	17	12,419	6	
20	岐阜	7	5	8	20	9,494	78.5	6	2,596	21.5	12	12,090	7	
32	広島	2	2	13	17	6,345	56.8	13	4,827	43.2	2	11,172	8	
8	東京		2	2	4	9,116	82.0	9	1,995	18.0	23	11,111	9	
38	高知	3	2	20	25	9,151	87.3	8	1,331	12.7	41	10,482	10	
4	秋田	2	3	1	6	7,814	82.7	10	1,638	17.3	33	9,452	11	
18	静岡	2	2	6	10	6,147	66.8	14	3,059	33.2	6	9,206	12	
11	群馬		3	5	8	6,957	79.3	11	1,818	20.7	31	8,775	13	
2	青森	5	2	6	13	6,510	77.8	12	1,855	22.2	29	8,365	14	
36	香川	1	2	6	9	5,506	69.8	15	2,379	30.2	13	7,885	15	
23	石川		2	3	5	4,463	61.4	16	2,808	38.6	8	7,271	16	
33	山口		2	2	4	3,763	57.8	20	2,745	42.2	10	6,508	17	
3	岩手	1		1	2	4,443	69.0	17	1,993	31.0	24	6,436	18	
31	岡山		2	1	3	2,898	50.1	25	2,888	49.9	7	5,786	19	
46	鹿児島	2	1		3	3,432	60.2	21	2,268	39.8	16	5,700	20	
29	奈良		1	2	3	3,945	75.2	18	1,298	24.8	43	5,243	21	
22	富山		2	2	4	3,775	72.6	19	1,425	27.4	38	5,200	22	
21	福井		2		2	3,057	59.5	23	2,079	40.5	21	5,136	23	
17	山梨	1	3	2	6	3,166	62.0	22	1,939	38.0	27	5,105	24	
10	埼玉		2	2	4	2,900	59.6	24	1,968	40.4	25	4,868	25	
39	愛媛	1		5	6	2,200	48.6	29	2,325	51.4	14	4,525	26	
28	兵庫		1	7	8	2,170	49.3	30	2,230	50.7	18	4,400	27	
41	佐賀		2	3	5	2,800	65.1	26	1,500	34.9	36	4,300	28	
12	栃木		2	1	3	1,429	33.8	37	2,802	66.2	9	4,231	29	
27	大阪			3	3	2,030	48.9	31	2,125	51.1	19	4,155	30	
24	三重					2,753	67.8	27	1,309	32.2	42	4,062	31	
35	鳥取	4	1		5	1,339	36.9	39	2,287	63.1	15	3,626	32	
13	茨城		1	1	2	1,551	43.4	35	2,022	56.6	22	3,573	33	
45	宮崎			2	2	1,769	52.3	33	1,613	47.7	34	3,382	34	
26	京都	1		2	3	1,418	42.1	38	1,952	57.9	26	3,370	35	
37	徳島		2	1	3	1,243	37.4	41	2,082	62.6	20	3,325	36	
30	和歌山	1	1	3	5	1,272	40.4	40	1,877	59.6	28	3,149	37	
1	北海道					2,002	64.0	32	1,127	36.0	44	3,129	38	
40	福岡		1		1	1,669	53.6	34	1,445	46.4	37	3,114	39	
34	島根	2		2	4	1,507	49.7	36	1,528	50.3	35	3,035	40	
47	沖縄					2,350	78.5	28	644	21.5	46	2,994	41	
42	大分	2	1		3	735	28.6	45	1,836	71.4	30	2,571	42	
19	愛知		1		1	634	26.9	46	1,724	73.1	32	2,358	43	
43	長崎		1		1	747	34.7	44	1,403	65.3	39	2,150	44	
14	千葉			1	1	1,037	48.3	42	1,111	51.7	45	2,148	45	
9	神奈川	6			6	1,013	63.8	43	575	36.2	47	1,588	46	
25	滋賀					93	6.4	47	1,354	93.6	40	1,447	47	
	計	58	92	162	312	220,255	68.4		101,627	31.6		321,882		

当表は『満洲開拓史』(満洲開拓史刊行会)に記載のものを整理した『長野県満洲開拓史(総論編)』(長野県開拓自興会刊)に記載(309頁)のものを再整理して作成した。開拓団員数については当時の混乱、統計の取り方等により数値に開差があり、当表についても一応の目安として頂きたい。なお、後に全国開拓自興会(解散)では暫定的な満蒙開拓団員総数について約27万人としている。

(「満蒙開拓平和記念館」寺沢秀文作成)

長野県満蒙開拓団・旧都市別一覧表 表 2

旧都市	送出国			帰国者		未帰還者		未渡満	義勇隊
	(人)	(%)	うち義勇隊 (人)	(人)	(%)	(人)	(%)	義勇隊 (人)	総数 (人)
下伊那・飯田	8,389	25.4	990	4,205	50.1	4,184	49.9	118	1,108
諏訪・岡谷	2,975	9.0	489	1,884	63.3	1,091	36.7	55	544
東筑・松本	2,918	8.8	812	1,749	59.9	1,169	40.1	95	907
南佐久	2,681	8.1	267	1,307	48.8	1,374	51.2	19	286
上伊那	2,615	7.9	517	1,418	54.2	1,197	45.8	86	603
西筑摩	1,987	6.0	169	919	46.3	1,068	53.7	26	195
小県・上田	1,954	5.9	420	984	50.4	970	49.6	37	457
北佐久	1,471	4.5	328	796	54.1	675	45.9	17	345
下高井	1,408	4.3	245	467	33.2	941	66.8	31	276
上水内・長野	1,392	4.2	548	748	53.7	644	46.3	68	616
更級	1,008	3.1	272	372	36.9	636	63.1	15	287
下水内	972	2.9	211	404	41.6	568	58.4	46	257
埴科	855	2.6	303	445	52.0	410	48.0	9	312
上高井	817	2.5	244	448	54.8	369	45.2	30	274
北安曇	780	2.4	234	445	57.1	335	42.9	36	270
南安曇	770	2.3	167	358	46.5	412	53.5	32	199
総計	32,992	100.0	6,216	16,949	51.4	16,043	48.6	720	6,936

※. 未帰還者のうち14,940人死亡、1,103人残留(213人不明)

- ※1. 長野県開拓自興会編纂『長野県満州開拓史』(昭和59年3月31日発行)より転載。
 ※2. 上記の数は昭和20年8月9日のソ連侵攻時の在満者数を基準としているので注意。

「満蒙開拓平和記念館」作成